やさぐれ勇者血風伝　勇者様はオヤジ！？

土方　真吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
やさぐれ勇者血風伝　勇者様はオヤジ！？

【Ｎコード】
Ｎ１２９６Ｚ

【作者名】
土方　真吾

【あらすじ】
世界の平和と人々の笑顔を守ると言われる勇者。
魔王軍の襲撃に、大賢者によって異世界から呼び出されてその称号を受け継いだのは、召喚初日に魔族と契約して嫁にしてしまうようなとんでもない奴（助平オヤジ）だった！
だが、勇者は魔王と出会うことなくその幸せな生涯を終えた。
しかし、死の眠りに落ちようとしたオヤジをしつこく呼ぶ声。
その喧しさに目を開けるとそこには……

このお話には、パロディオマージュリスペクト様々な名目で何処かで聞いたようなネタが含まれます。
また、このおはなしには過激残酷その他もろもろの有害とされる表現が含まれるかもしれません。
「あ、このネタ見たぜＨＡＨＡＨＡＨＡｗｗｗ」ぐらいの勢いでご笑覧いただけると幸いです。

Oyaji Meets Girl

「……勇者殿」

今日、朝からの出来事を思い出す。
とは言え、普通に朝飯を食っていて、気が付いたらここにいた。

「…勇者殿？」

ため息を一つ。

仕方ないので軽くこれまでの人生を振り返ってみる。

たいして実りのない人生だった。
家族もおらず、貯金もない。
最近はすっかりメタボ気味な腹と、薄くなった頭が寂しい。

なんだか死にたいほど虚しくなったので遠い目をしてみると、ガッと鈍い音とともに目から火花が出るような痛みが襲った。
と言うか本当に火花でた。チカチカっと。

「っぅ〜〜〜〜　な、何しやがるクソガキっ」
「さっきから呼んどるじゃろが、クソオヤジ！　」

視線を落とせば、何やらねじくれた木の杖をグリグリと押し付けてくる少女が目に入る。
純白の長い髪をなびかせ、ルビーのような透き通る深紅の瞳を大きく見開いて、プリプリ怒っている姿はどこまでも愛らしかった。

コイツがこの杖で向こう脛をひっぱたいたのでなければ、だが。

「いいか、お兄さんは勇者とか言う奇天烈なジョブにはついてないんだ。他を当たってくれ！」

ペシッと杖を払いのける。

「わしだって貴様のようなオッサンが勇者なんて思わんわっ」

払いのけた杖を再び突き付け、少女は偉そうに薄い胸をそらして言った。

「じゃが、召喚呪法は成功しておるのだ！　貴様がなんであれ、この魔王との戦争を終わらせる鍵――」

ジットリと見つめるこちらの視線に、深紅の瞳が自信なさ気に泳ぎ始め、やがてそらされる。

「ノハズ…タブン」

「オイィイ！？」

残念な賢者

とりあえず話をまとめとめてみる。

長い間平和に過ごしてきたこの世界は、突如北方に現れた自称魔王の侵略を受けた。

そして……

「人類は滅亡しました！」

「しとらんわーっ！！　って言うか爽やかな笑顔でなんてこと抜かしおるか、このクソオヤジ！！」

怒り狂って襲い掛かる白い少女の頭をわしづかみにして止める。

この少女はこんななりをしているが、齢三百を越える大賢者、レナンと言うらしい。

「どう見てもただのちびっこだが」

「ちびっこ、言うなーっ！！」

「ハイハイ、賢者賢者……　ふぅ」

「ムキーッ！！」

レナンはジタバタともがいて、掴んだ手からようやく脱出すると杖を突き付けてきた。

「ど、どうやら、わしを本気で怒らせたいようじゃな～～～～～っ」

「涙目でそんなことを言われても、なぁ？」

「ウヌヌヌゥ！」

実にからかいがいのある少女だ。

「よかろう！　ぬしの旅の連れにと、白魔術師を呼んでである。
そろそろここへ到着する頃合いじゃ。こんがり炙っても、死なぬ程度に治せるじゃろう！
クックック、謝っても容赦せんからの？

魔術の力、存分に味わえィ！」

レナンの雰囲気が一変し、複雑な身振りで杖を振り回す。
視覚では捕らえられない何らかの力がその華奢な体を巡り始め、つややかな唇が唱える呪文が神秘の威力を――――

「ぴぎゃっ！？」

発揮しなかった。

「アホの子だろ、お前……」

何をやったのかと言えば、一歩前に出てその頭を拳骨で小突いてやっただけである。
衝撃で魔術が詠唱中断＜スペルブレイク＞するのは全世界共通らしい。

「ず、ずるいぞ……」
「ずるいもクソもあるか。
敵が目の前で呪文を唱えてるのに、なんで黒焦げになるのを黙って待たにゃならんのだ」

右手をワキワキさせながら、涙目で殴られた所をさするレナンに

詰め寄る。

「ま、まて。まだなにかするつもりか！」
「おう。敵にはきっちりトドメをささんとな？」
「て、敵？　カワユイ少女のお茶目な悪戯ではないか。笑って赦すのが大人の男と言うものじゃろう」

顔色を変えて後ずさるレナンにニッコリと微笑んで見せる。

「そうだな……」
「おお、わかってくれたか。さすがはわしの見込んだ勇者じゃ！」

ホッと安堵の息をもらすレナンに、判決を告げる。

「だが、悪戯好きの子供の躾も大人の義務だ」

ひょいと抱え上げると予想外に軽い。

「え？　え？　え？」

突然のことに真っ赤に頬を染めて動揺しているレナンのスカートをペロッとまくる。

「ちょっ　なにをっ」
「子供の躾は尻叩きと相場が決まってるだろ？」
「いやじゃ！　ていうか、変な所触るなクソオヤジ！　みゃあああああ！！！」

黒魔術師はアホの子でした

始まりはいつも突然、と歌の文句にもあるように、ドアが開いたのはいきなりだった。

「レナン様ー、居ないんで……　す、か？」

どうやら、騒ぎすぎてノックに気付かなかったらしい。

入って来たのは、年の頃１６～７ぐらいの少女が二人。

黒髪をキュッとポニーテールに結い上げた気の強そうな方がドアを開けた姿勢のまま固まり、その背中越しに覗き込んだ柔らかそうな金髪の優しげな顔立ちの少女の方は、「え？」っと、困惑の声と共に、みるみるうちに真っ赤に頬を染めた。

さて、状況。

ドアを開ければ美少女（自称）が、ムサイオヤジにスカートを捲られ、パンツを半分ずり下げられている。

「君は、ひきつった笑みを浮かべて、

「お取り込み中でしたか、失礼しました」とドアを閉めてもいいし、無言で立ち去ってもいい」

「するかっ　この不埒者め！！」

黒髪の少女は電光石火の動きで部屋に飛び込むと、容赦ない平手打ちを叩きこんできた。

「そうですネ。誰だってそうする。俺だってそーする……」

腰の入った平手打ちがいい感じに決まったせいか、クワンクワンとめまいがする。

魔の手を逃れたレナンは、ヨヨヨとわざとらしく泣き崩れる。

「えぐえぐ、嫌だと言うのに無理矢理このクソオヤジが……」

「な、なんて非道な！」

その言葉に黒髪の少女がますます激昂する。

「うっわ、事実しか言ってないけど汚くないか、それ！？」

「それにレナンさまも、なんだか楽しそうだったよ？」

こちらの主張も金髪の少女の言葉もまるっきり無視して、ビシリと杖を突き付けてきた。

「どうやら遠慮の必要はなさそうね。この一撃で黒焦げにしてあげるわ！」

同時に複雑な身振りと呪文の詠唱がはじまる。

今はマズイ、ダメージが足に来ている。

「風の乙女よ、その力を――」

早く中断させないと……

「荒れ狂え、真空の――」

せめて、逃げないと……

「引き裂き、焼き尽くせ――」

視界が正常に戻るが、黒髪の少女はまだなにかノリノリで詠唱を続けている。

「……なあ。いつ発動するんだ、これ？」

「うむ、今呪法修飾部分が終わったから、まあ一分くらいかのう」

いつのまにやら、ケロッとした顔でそばに居たレナンが解説する。

「魔術師（おまえら）全員アホの子だろ…」

黒髪少女の襟首をつまみ上げて外にほうりだす。

ガチャリと扉に鍵をかけたところで――――

「稲妻よ、焼き尽くせーっ　て、何で外に！？　にゃぁあああ！！」

「うむ、暴発したようじゃな」

家の外で爆音と悲鳴が上がった。

白魔術師はグレープフルーツがよく似合う

「はじめまして、勇者さま。白魔術師のシロエ・リリンホワイトと申します」

スカートのはしをちょいとつまんで、優雅に一礼した金髪の少女は次に寝室の扉を示す。

「彼女がクロテア・ローゼス、黒魔術師です。
ご無礼をお許しください。
悪い子じゃないんですけれど、ちょっとだけ、その……」

「クロは頭に血が上りやすくてのう」

ポリポリとクッキーをかじるレナンに冷たい一瞥をくれると、そっぽを向いて鼻唄を始めた。

魔術の電撃でいい感じに焦げていたクロテアは、シロエとレナンがベッドへ運んで魔術で治療した。
今はシロエのお土産のクッキーとお茶で一息入れたところだ。

「気にしなくていい、状況的に仕方ないだろ。
あと、見た目通りでただのオッサンだ。勇者でもなんでもない」

「うむ、カワユイ美少女がムサイオッサンに襲われておったら、助けるのがあイタタタっ」

レナンの頬をつまみ上げると、シロエは楽しそうに微笑んだ。

「でも、すごいですね」
「なに、ぐああ〜〜ッ！！」

右手に激痛が走る。
レナンが頬をつまむ手を振り払って、逆にかじりついていた。

シロエがクスクスと笑いながらレナンにクッキーを差し出すと、
「おお、良い口直しじゃ」などと抜かして口を放した。

「ああ、イテエ。歯型ついてるぞ、くそう」
「軽々しく乙女（おとめ）の柔肌を掴むからじゃ！」
「へぇー、処女（おとめ）、ね」
「いやらしい言い方するでないわ、助平親父———」
「それですよ、それ」

睨み合っているところに、シロエが割り込んでくる。

「なにがじゃ？」
「レナンさま、自分でお気づきじゃないんですね。
勇者さまと話してる時のレナンさまは、ものすごく楽しそうですよ？」

「むう？」

「私達とだってそんなに話さないじゃないですか。
お客さまが貴族でも用事が済んだらすぐ追い返しちゃうでしょう」

レナンは不愉快そうに口をへの字にして、ちらちらとこちらをうかがう。

「い、いや。コヤツ相手だと悪口に遠慮がいらんと言うか、その……」

何やらモゴモゴ呟くレナンに、手のかかる妹を見るかのような優しげな目で微笑んだシロエは、こちらに向かって話しかける。

「今まで魔術師をああいう方法で無力化した人はいません。勇者さまが初めてですよ！」

「……ああ、ソウデスカ。魔術の師匠どもはどんな教育してるんだか」

あまりの脱力感に、がっくりと崩れ落ちてテーブルに頬をつける。

一体、この世界はどんだけユルイのだろうか……

「あ。でしたら、お城に行くついでに、アカデミーにお寄りになればいいと思います！」

シロエが少しこちらに身を乗り出すと、なかなかにボリュームのある胸がテーブルの上でムニュ～っと形を変えた。

「グレープフルーツ？」

「このエロ親父め……」

すかさずレナンが耳をつまんでギュッと引っ張る。

シロエは一瞬、きょとんとしたがすぐに気が付いて、胸を抱き寄せるように隠した。

「もう。駄目ですよ、勇者さまったら」

少しだけ頬を染めて、はにかむシロエはむやみやたらに可愛い。

「鼻の下伸ばしすぎじゃ、たわけ」
「だってよ～」

レナンがしつこく耳をぐいぐい引っ張るが、赦す。
今までの人生で、美少女に囲まれたこんなアレな時間があっただろうか？

いや、ない。

「レナン様！　シロ！　無事なの？！」

寝室の扉がドバンと開いて、幸せな時間はあっさりと終わった。

クロテアは頬を染めて胸を抱きしめるシロエを見て、今度はどんな勘違いをしたのやら、プルプルと怒りに震えながら指をビシリと突き付ける。

「あ、あ、あんた、レナン様はともあれ、シロにまで」
「わしはともあれかい……」
「クロちゃん、違うの。これは――――」
「問答無用！！」

頼むから、俺と問答をして欲しい。
どうせ聞いてくれないっぽいから言わないが。
クロテアは再び杖を構える。

「立て、下郎……」

ため息を一つ。

そこまで言われたら腹も立つ。
「お前、覚悟をしてるんだな？」
「は？」
クロテアは整った眉をひそめた。戸惑いがその瞳に混じる。
「人を殺そうとする以上、相手に逆に殺される覚悟を、自分のすべてを失う覚悟をしていると判断するぞ」
固く冷たいものを声に乗せる。
クロテアに背を向けて、テーブルからカップをとり、少し冷めたお茶を飲み干す。
「いや、まて、勇者よ」
「勇者さま…」
レナンとシロエが、その表情を見て絶句する。
ただの無表情だ。
これから向き合うものを、ただの障害として、なんの感慨もなく排除する時に自然に浮かぶもの。
庭の雑草、道端の石ころ、食べ終わったアイスの棒、使用済みのティッシュ、そんなものを片付ける時と同じ顔だ。
「安い脅しね。私はそんなものに怯みはしない！」
「そうか、なら好きにしろ」
お互いに向き合うと、クロテアは即座に詠唱を始める。

目を閉じて、華麗に、軽やかに杖を振り回し、よく響くいい声が堂々と呪文を歌う。

そして――――

「風の乙女――　うひゃうっ！？」

「レナンより有るがシロエよりちょっと小さいな。オレンジか？」

背後にまわってクロテアの胸を揉みしだく俺に、その場の全員が呆然としていた。

職業・勇者。

時刻はいつのまにか、夜。
朝、異世界に来たらロクに状況も分からないまま、いつのまにか夜。

さて、たった今起こった奇妙な出来事について聞いてほしい。

命を狙って来た敵を無傷で無力化しようと頑張って見たら、横からドロップキックを喰らった挙げ句、敵と観客の二人がかりでタコ殴りにされ、なおかつ正座の上でかれこれ数時間説教が続いている。

あなたなら、どうする？

「最低だった」
「だまれ、エロオヤジ」
「勇者さま、エッチなのは良くないと思います」

世の中何処まで行っても、理不尽だとしみじみ思う。

ちなみに、加害者から被害者に華麗な転身をきめたクロテアは、レナンと二人で俺を散々痛め付けたあと、２階の客室で休んでいる。

「ともあれ、明日になったら城へ向かう。シロも今夜はゆっくり休むとよい」
「はい、レナンさま。お休みなさい。勇者さまも」
「うい、お休み～」

シロエはニコリと慈愛の微笑みを浮かべて一礼すると2階へ上がる。
勝手知ったるなんとやら、だろうか。クロテアもシロエも特に部屋を聞いたりはしていない。

「あー、質問が…」
「却下じゃ」

ジロリ、とレナンの冷たい視線が刺さる。

「俺にもメシと寝床を――――」

「だまれ、エロ親父が！！　竈の前で灰でもかぶるが良いわ！」

レナンは正座中の俺の目の前で仁王立ちになって腕を組む。

「全くもって嘆かわしい……

アレか、おぬしの世界では勇者という言葉はエロい意味の隠語かなにかか！？
勇者！　嗚呼、なんて卑しい職業なんだ！！
とか内心喜びにうち震えたりしておるのか！？

礼儀をわきまえぬは仕方なかろう。
あんなふうに畏れを知らず魔術を妨害出来るのはある意味賞賛にあたいするじゃろう。

じゃが、よりにもよって、ち、ち、ち乳モミとは～～～っ」

どうやらレナンの怒りゲージが爆発したようだ。

いきなり俺の襟首を両手でつかんでガクガクと揺さぶりながら叫ぶ。

「……やっぱり乳か！　そんなに大きい乳が好きか！？
つるぺたは希少価値なんじゃぞ！
ひんにゅーはすてーたすなんじゃ！！」

「悪いインターネットに毒されすぎだ！」

怒りのツボはそこらへんだったらしい。

「大体、なんでクロは乳モミで、わしが尻叩きなんじゃ！　襲うならわしから襲え！！　さあ襲え！」
「いいから落ち着けっ　首を絞めるな！」
「首くらい、……ぅえあ！？」

「……」
「……」

沈黙で耳が痛い。

自分が何を言ったのか気が付いたレナンはみるみるうちに耳まで真っ赤に染まり、

「あああああ、何もかもどちくしょーっ！」

俺を殴り倒して、自分の部屋へ駆け込んだ。

考察1　あるいは、そのまま乙πに溺れて溺死しろ！

「さて」

竈の前に腕枕でゴロリと転がる。

時刻はそろそろ真夜中と言うところか。
いい加減、真面目に状況を整理してみよう。

ここは森の中の一軒家だ。家というか、二階建ての屋敷だな。
石と木で出来ていて、窓は木枠にガラスがはまっている。
外側には、金属製の鎧戸があり、ガッチリ閉じられる。

つまり、だいたい近代レベルの建築技術があるわけだ。

扉の鍵は、中からはツマミを回せば外せるが、外からは鍵を使用せねばならない。これは現代レベルだろう。

そして、台所。

何と、水道がある。
もちろん、金属管の先に蛇口の付いた現代的なものではない。
シンク代わりの長方形の石の桶に、木の樋(とい)で水が導かれている。
溢れ出した水は、どうやら下水設備もあるのか、そのまま下に敷かれた玉砂利に吸い込まれるようにして流れていく。

と、いうか恐ろしい事にこの台所は現代のキッチンとほとんど変わらない。

隅にある怪しい模様が描かれた箱はおそらく魔術で冷やす冷蔵庫だし、棚にはガラスのコップや陶器のカップもある。
流石にガスはないようだが、カマドには冷蔵庫と似たような模様が刻み込まれているので、火力調節も簡単なのかもしれない。
壁の何箇所かには燭台（しょくだい）があるものの、光っているのは蝋燭の炎ではなく台そのものだった。
どうやら魔術による明かりらしく、俺が寝転がってからしばらくすると順番にゆっくりと消灯して行った。
動作感知式のスイッチかと思わず手を振ったりしてみたが、再び点灯する気配はなかった。

そして次は……

「……あ、勇者さま？」

ガチャリと扉が開く。

同時に、消えた明かりがいくつかぱっと点灯した。どうやら明かりは持続時間切れで消えたわけではないようだ。
目をむければ、そこには純白のネグリジェに身を包んだシロエが寝ぼけまなこで立っていた。衿元を彩る赤いリボンが愛らしい。

そう、衣服の縫製技術なども不釣り合いなほど高い。

きめの細かい織り方をされた柔らかそうな生地は、その内側の盛り上がりを危険なほどに強調している。
まさに双丘と呼ぶにふさわしいそれは、シロエのわずかな身じろぎに反応してたゆんたゆんと揺れるのだ！

そもそも、布を白や黒に染めるには、意外に技術が要るはずだ。

それはそれとして、何という小生意気な乳だ、実にけしからん！

……いかん、ちょっと思考が疾走（オーバードライブ）してしまった。

「こんな所でどうしたんですかぁ？」

「寝てる」

シロエは目を擦りながら、寝転がる俺の前を横切って棚からグラスをとって、水を汲んだ。

裾からのぞくスラリと伸びた生足が色っぽい。

「ふふ、またレナンさまと喧嘩ですか？」

シロエはゆるーい笑顔を浮かべると、テーブルについて、コクコクと水を飲みはじめた。

眠いせいか、話し方が幼くなっていて、そこがまた可愛らしい。

「喧嘩に見えるか？」

シロエは飲み干したグラスを置くと、ふにょりと微笑む。

「お父さんが可愛い娘をからかっているようにしか見えなかったですよー」

と、答えると、そのままテーブルに上半身を投げ出すように、突っ伏し、

「ちょっと、うらやましい――――　かも……」

つぶやくように言うと、そのまま寝息を立てはじめる。

「おいおい、寝るなら寝床行けよ」

返事がない。ただの寝ぼすけのようだ。

「しょーがねぇなあ」

立ち上がりシロエの肩を軽く揺する。

「ほれ、起きろって」

何度か揺すってやると、ようやく目を少しだけ開ける。

「だっこ」

「はア？」

「だっこ、して？」

「寝起き悪いな、オイ」

半分眠ったままで、両腕を差し出すシロエに苦笑いをひとつ。

正直にいえば腰にきそうで少し不安だったが、抱き上げてみれば予想外に軽い、というか余裕だった。

レナンも見た目よりかなり軽かったし、もしかしたら、肉体の組成が俺とは少し違うのかも知れない。

ぎゅっと抱き着いてくるシロエは目を閉じたまま、嬉しそうに微笑んでいる。実に無邪気なものだ。

乳を押し付けられるこっちの葛藤など、夢にも気付くまい。

「部屋は、ひとつ目でいいんだな？」
「うん～」
階段を上り、ひとつ目のドア。
シロエを左腕で抱き直して開ける。
相手がしがみついている分、片手でも何とかなった。
薄暗い室内に、二つベッドが並び、その間には書き物机らしき家具が置いてある。
「ほら、つい――――　わぶっ！？」
そっとベッドに降ろしてやったシロエが、手をのばして俺を引き寄せた。
あっさりバランスが崩され、顔がもろに軟着陸する。
どこにって、……たゆん、と。
「……ねー、いっしょに、ねよ？」
「は？」
待て。
これは明らかにおかしい。
当たり前だ、寝ぼけてるし。
いやそうでは無く――――
「……だめ？」

シロエが俺の頭をぎゅっと抱きしめる。柔らかな膨らみが顔をおしつつみ、息が詰まる。

このままじゃまずい。

理性とかじゃなく、生命的な意味で。理性もヤバイけれど。

「おねがい、おとーさん……」

ギクリ、と背骨が固まる。

そのまましばらくすると完全に寝入ったのか腕が緩み、ようやく幸せな地獄を脱出した。

シーツをかけてやる時に足が動いてちらりと白い下着が見えたりもしたが、構わず外へ向かう。

そう、俺は中年だった。

なんとなく雰囲気に流されかけてはいたが、こいつらはみんな子供のような年齢ではないか。

背中に冷や水をぶっ掛けられたかのような気分で、すごすごと部屋の外に向かう。

「……ちょっと残念だった、かな？」

扉を開けて、肩越しに振り向いて格好を付けて一言。

このぐらいは許されるだろう――――

「私は物凄く残念だったわよ？」

「ッ？！」

完全に隙を突かれて廊下に押し出される。

「残念だわ、指一本でも出したら……」
「ちょ、おまっ！？」

クロテアはしゅっしゅっと、出刃包丁を素振りしてみせる。
その瞳はハイライトの消えたいわゆるヤンデレの目だった。
じっとりとした嫌な汗が背中を濡らす。

「電波的な真似はやめれ」
「あんた魔術効かないし、仕方ないでしょ？」

だからって出刃包丁かよ！？　とか、猟奇にも程があるぞ！？
とか、心の中だけで突っ込んで、なんとか気を取り直し、寝床に戻る事にした。
どうせこいつはまともに話を聞かないし。

「じゃー、お休み。せめて、鞘のある刃物にしとけ。手、切るから」
「夜ばいに来たら刺すわよ？」
「へいへい……」
「……シロを運んでくれた事には感謝するわ。お休み」
「へいへ……」

振り向いた時には扉は既に閉ざされていた。

たらたらと階段を降りながら、考察を再開する。

「”出刃包丁”か……」

出刃包丁があるということは。

「――――やっぱり鍛造技術もあるか」

ご丁寧に、刃紋まで浮かべた柳刃包丁をもとの場所に戻す。

魔術があるせいか、実にカオスな技術レベルの世界らしい。

しかし、これだけの金属加工が出来るなら、人間相手の戦争ならそうそう不利になるとは考えにくい。

通常であれば、魔物の戦闘力がズバ抜けている、と判断するところだが……

「魔術の使い方からして、そんなにシリアスな戦いとは思えんよなぁ？」

竈の前に改めて転がりなおす。

シロエが来てから点灯していた明かりが再び消えた。

ついでに冷蔵庫や野菜庫をあさって調べてみた食品は、見たことのある物ばかりだった。

味まではわからないので、試しにくすねて来た、不確定名「林檎っぽい果物」を、服で拭ってかじってみる。

「おう、林檎だな」

多少酸味が強いが、間違いなく林檎だった。

とは言え、クッキーなんぞという菓子まであるのだから、食べ物については元の世界とほぼ同じと考えてはいたが。

現代でこそクッキーは簡単な焼き菓子だが、それはオーブンが使えたり、バターや砂糖が簡単に手に入るからこそだ。

冷蔵設備がなければ、バターなんぞ保存しようがないし、火力調節の簡単な機械式オーブンだからこそ、焼き加減も自在なのだ。

実のところ世界がユルい分にはなんの問題がない。

いや、むしろ大歓迎だ。

なんせ、こちらはなんの取り柄もない中年なのだ。

あまりにハードでダークなファンタジー世界だと、屋敷から出た途端ランダムエンカウントで即死しかねないし。

優しい真夜中の乙女たち

竈でチロチロと燃える燠火(おきび)は、掛ける物がなくても十分な暖かさを感じさせてくれる。

うとうととしながら踊る火を眺めていると、何やらそれが人型に見えてきた。

バレリーナのように深紅の透ける衣装に身を包んだそれは、クルクルと炎のたなびきに合わせるように踊る。

すっと通った眉筋の、凛々しくも可愛らしい少女の姿だ。

「……夢、か？　それとも精霊の類(たぐ)いか？」

ぼんやりとつぶやくと、それはニコリと微笑んで、より高く舞い、より激しく踊る。

「おう、大したもんだ」

ぱちぱちと手を叩いてやると、それは嬉しそうにますます激しく舞い始める。

どうやら、本物らしい。

なんせ、それの踊りが激しくなるのに合わせて、竈の温度もうなぎ登りだ。

「さすがに熱いぞ」

ごろごろと転がって距離をとると、精霊は踊りを止め、口元に手を当て、ひとしきり楽しげに笑うと、優雅に一礼して消えてしまった。

どうやら、精霊魔術とでも言う系統も有るようだな。

精霊がいるんだし。

それにしても、だ。

「こんだけ攻撃手段が有り余ってるのに、なんで魔物に押されっぱなしなんだか……」

答えの出ぬ問いかけ。

俺はそのままとろとろとした睡魔に溺れて行く。

視界の隅で微笑むのは、精霊か、それとも――――

「んー？」

やわやわと揉みしだかれる感触に意識が覚醒していく。

夢うつつの錯覚ではなかった。

目を開ければそこはヴェールに閉ざされた天蓋付きのベッドの上で、寄り添うように寝そべった少女が、ゆるゆると手を動かしていた。

「ナニやってんだ、お前？　お？」

軽く脳天にチョップを落とそうとして、指一本動かせない事に気

づく。

「無粋な事を言うでない」

白髪赤眼の少女は、手を止めてのしかかる。

紅い唇が今にも触れそうな距離で囁く。

「肌を晒した男と女が閨(ねや)の中じゃ、することはひとつしかあるまい？」

甘い吐息に、脳の奥が痺れるような酩酊感と、炎のような衝動が身体に宿る。

「まあ、そうなんだが」

少女が身体を起こしてまたがった。

ちゅ、くちゅ。

そんな湿った音。熱くぬめった感触。

少女は潤んだ瞳でこちらを見下ろす。

まだ、だ。

「何をためらう？　おぬしのここはほれ、この通りではないか」

胸に手をつき、唇を触れる寸前まで近付けて囁く。

意識を蕩けさせる甘い吐息。

ちゅ、くちゅ…

少女の腰だけがいやらしくくねり、とろとろとした汁が擦りつけられる。

「あの二人を気にしておるのか？　ならば案ずる事はない」

その両掌が頬を挟み、紅い瞳がこちらの目を覗き込む。

「ここは魔術的に閉ざされておる。　んっ　はぁ……」

切なげにこぼれる甘い吐息。

少女はふるふると一瞬だけ張り詰め、弛緩する。

「はぁ、はぁ――　見よ、おぬしがあまりに焦らすものじゃから……」

少女は淫らな笑みを浮かべ、細い指先でこちらの胸を撫で回す。

「そりゃあスマン。実のところ、こちらとしてもやる気満々だったりするわけなんだが」

当然だろう。

見目麗しい少女が自分に跨がり、腰を振って励んでいるのだ。

身体がまともに動いていれば、即座に押し倒すのもやぶさかではない。

「ふふ。ならば後は身体で示してくれればよいぞ？」

少女は腰を浮かすと、それを握り、自分のそこに当てがった。

先端が熱い潤みに触れ、じわりと快感が染み込んでくる。

後は、ほんの少し腰を下ろせば――――

「で、お前誰？」

時が、止まる。

「し、失敬な！　わしは――――」

「レナンとか言うなよ？
顔見知りの姿でやると、後で気まずいから止めてくれないか？」

少女は悔しそうに、唇を尖らせる。

「いつ気づきましたか？」
「最初から。色気を出し過ぎたな。あ、性的な意味で」
「不覚です、ミスチョイスでしたか」

「ついでに言えば、お前が何なのかは想像もついてるぞ？」
「……伺いましょう」

「夢魔の類いだろ？
ここは夢の中だ。
淫らな夢を見させて、生命力的なものを奪う。

吐息には性的興奮をもたらす成分か、魔術的何かが有るはずだ。
じゃなかったら、普通にキスする場面であんなに勿体つけたりしないだろ？

多分、実体の方もオレの体に接触している状態のはずだ。
ブレスを嗅がせにゃならんからな」

「成る程。しかし、これが夢だと判断するのは些か早計ではないですか？
モデルの少女が思い余ってと言う事も――――」
「これでも、自分の容姿と人格が、若い異性をメロメロにするかどうか判断がつく程度には歳をとってるさ。ＨＡＨＡＨＡ……」
「えー、なんだか謝った方が良さそうですか？」
「止(や)めれ！　そこで謝られると、本気(マジ)で凹むから！？」
望陀の涙を流す俺に、少し引き気味に夢魔がフォローを繰り返してくれる。
かなりいい子のようだ。
レナンとクロに爪の垢を煎じて飲ませたい。
「そ、それにしても素晴らしい判断力ですね。今までそこまで気づいた人間はいませんよ」
「慰めるなって……　ああ、やっぱり夜な夜な獲物を求めて徘徊するのか？」
「失敬な！　淫魔(ビッチ)みたいに言わないで下さい。自慢じゃありませんが、これが初めてです！」
「いだだだっ！？　悪かった！　謝る！　だから乳首抓るのは止めれっ」
むーっと頬を膨らませていた夢魔は、すぐにくすっと笑った。
その姿がにじむようにぼやけ、新しい姿に結像する。
整った輪郭、そこにはめ込まれた切れ長の大きな瞳は、濡れたように艶やかに輝く髪と同じ漆黒。
抜けるような純白の肌をもつ身体は、少女から大人へ成長し始め

たばかりの微妙なラインを描く。

「おう、それ本当の姿か？
最初からその姿で現れて、ちゅーのひとつでもしてくれたら速攻で魅了されてたな」
「ふふ、ありがとうございます」

満足そうに笑う夢魔の姿は、文句無しに美しい。

「私達の種族は、たしかに貴方の言うような特徴を持ちます。
が、最初に交わった相手と死ぬまで共生します」
「共生？」
「はい。私達は快楽を、宿主からは生命力を」
「死ぬまで？」
「はい。宿主が死ぬまで」

まずい。
なんだかよろしくない雰囲気だ。

「あー、もし宿主が死んだら？」
「宿主を変える事はありません。
私達も死にます。
こう見えて一途なんですよ、私達は」

やっぱかー
心で血の涙を流しつつ告げる。

「ゴメン、そう言う事なら無理」

夢魔の表情が凍りついた。

後腐れの無い遊びであったなら、割り切って楽しんでしまっただろう。
実際、下半身の方は完全に臨戦体勢。先端に触れる柔肉を蹂躙する時を今か今かと待ち望んでいる。

「オレは魔王との戦争に駆り出されるために異世界から呼び出されたらしいからな。
朝にはここから出発するし、そうなればいつ死ぬか、死なないまでも元の世界に戻る可能性もある。
それに、オレはそろそろ人生の折り返し地点を通りすぎる年寄りだ。
お前ほどの女なら、若くていい男なんかより取り見取りだろ？
ものすごく残念ではあるが、別のパートナーを探した方が――――」

「えい」

つぷん。
音にすればそんな感じだろうか？
何か薄いものを破る感触と、腰にかかる一人分の体重。

そして、夢魔は痛みをこらえるように、僅かに震えた。

「すみません、腰が滑りました」

夢魔はやたら嬉しそうに謝った。
幻の閨は消え失せ、キッチンの固い床の上、体勢だけは夢と同じく、しっかりとつながりあっていた。

「えい、とか言ってただろうが！？」

夢魔はゆっくりと身体を倒し、頬を胸に擦り付ける。

「こまけえ事は良いんだよ！　って感じです」

ため息をひとつ。

「好き好んで寿命を短く設定することは無いだろが？」

ようやく動かせるようになった腕を、その身体にまわす。

最後に人肌に触れたのはいつだったか。

「貴方は……」

夢魔はこちらの頬を両手で挟み、その漆黒の瞳でまっすぐに見つめた。

「貴方は、貴方が思っているより、ずっとキュートですよ」

心臓がトクン、と脈打つ。

そのまま、どちらからともなく、深く口づける。

「大事なのは、どれだけ生きたかじゃなくて、どう生きたかだと思います」

鎧戸の隙間から、登り始めた太陽の光が僅かに差し込み始めた。

「今日は時間切れですが――――」

ちゅ、ともう一度軽くキス。

「短いなら短いなりに、とびきり濃厚に過ごせば良いんです。だから、夜な夜な、優しく、たっぷりと、搾りとってあげますね？」

夢魔は柔らかい笑みを浮かべ、日の光に溶けるように消えて行った。

残されたのは……

「どうしろと？」

半裸の中年一人と。

「あと、精霊の癖にそんな目で見るのは止めれ。死にたくなるから……」

ジットリとした目で竈の中からこちらを睨む精霊が一人。

精霊使われＬｖ１と夢魔の置き土産

ざっと衣服を整え、また横になる。
あれの言葉が全て真実とは限らないし、この件はとりあえず夜まで保留だ。

身振りで薪をくべろと言う精霊に従って何本かほうり込み、ついでに一服つけようと、煙草をくわえる。
フィルター付きの紙巻きなど有るはずも無いだろうから、この辺も考え所だ。オイルライターも意外に消耗品の固まりである事だし。

竈の中から適当に薪を引っこ抜き、火を着けようとしたところで、キッチンのドアが開いた。

「おう、おはよー…　う？」

レナンは、ドアを開けた状態で固まっている。

「なにボケてるんだ？」

視線はレナンにむけたまま軽くひと吸い。ちりちりとした熱に炙られて、煙草に視線を戻せば……

「おう…」

薪に腰掛けた炎の精霊が、煙草の先端にちゅーしていた。

「こ、この……」

ワナワナと震えるレナンは、壁のフライパンをとってゆっくりと歩みよる。

「あー、なんで怒るのか分からんのだかー」

「見境いなしがあっ！！」

皆まで言う隙もなく、殴り倒されました。

結局、この騒ぎはレナンの罵り文句を聞き付けた、シロエとクロテアがキッチンに来るまで続いたのだった。

「冷静に考えると、ありえんのう」

「ありえないわね」

「ありえませんね」

ようやく騒ぎも収まり、魔術士達が状況を理解しての第一声がこれだ。

「なんかよー分からんのだが、精霊は普通に居るもんじゃないのか、ここ？」

レナンが精霊を指差す。

「精霊はおるし、そういう魔術もあるわ。

じゃが、精霊使いでもない者に見えるほどハッキリと姿を現したり、ましてや、自分から煙草に火を付けるなぞ前代未聞じゃ」

「基本的に、精霊は自然の力の現れそのものですから、呪文もなしに人間の都合のいい働きはしないんです」

「火の精霊が一般人に見えるほど活性化するなんて、火山の火口とかぐらいよ？」

レナンの解説に、シロエとクロテアが言葉を繋ぐ。

「勇者として召喚に引っ掛かったのは、精霊使いの才能かのう？ちょっと精霊に何か命じてみよ」

「何かって、何を？」

「あ、あの燭台なんかどうですか？」

壁に据え付けられたそれを、シロエが示す。

「ふむ…」

距離は大体３ｍと言う所か。

これに成功すれば、晴れて精霊使いＬｖ１と言うわけだな。

とは言え、精霊の力的な物を感じているわけでも無いのだが。

「あー、あの燭台に火、つけてみてくれないか？」

試しに話しかけてみる。

精霊は唇の下に人差し指をあてしばらく考えるようなそぶりをしてから、自分の足元の薪をつついた。

「持てってか？」

頷く精霊を落とさないように、そろそろと薪を持ち上げる。
「むう、人語で意思疎通出来とるのう」
「勇者様にはすごい才能があるのかもしれませんねぇ」
チョコンと薪に腰掛けた精霊は、今度は燭台を指差した。
「ほら、あっち向けって言ってるわよ」
何やらクロテアがニヤニヤし始める。
クルリと向きを変えると、精霊は更に進めの合図。
「むう、これは」
「えーと？」
レナンもニヤニヤとし始め、シロエも片手を頬にあて、困った表情だ。
なんか落ちが見えてきた。
数歩歩き、薪を燭台に差し延べると、精霊は蝋燭に手が届く位置に来てようやく、腕を伸ばして着火した。
「薪の火を移したのとどう違うんだ、これ？」
レナンとクロテアはすっかり腹を抱えて笑っている。
「あんた、才能あるわよ、精霊使われの！」
「クロ、上手い事言い過ぎじゃ！　笑いが止まらんではないか！」

酷い奴らも居たものだ。

救いを求めて、シロエを見れば…

「ご、ごめんなさいっ」

プルプルと笑いをこらえて震える少女の姿。

「……お前ら、全員一列に並べ」

俺はこの上ないほど爽やかな笑みを浮かべて見せる。
薪は、ぽいっと竈へ投げ込み、両手をワキワキと準備運動。
昨夜の反省なんて忘れた。
躾けは厳しく迅速に、だ！

「嫁に行けなくなるまで乳揉んだるわーっ！」

先ずはフィジカルと攻撃性の強いクロテアを攻める。

「ちょ、あんた、やめっ　ひゃうう〜っ！」

勝手知ったるなんとやら。弱点は分かってる。指使いは繊細に、攻撃は大胆に、だ。

「おぬし！　またクロか！？　やめい！」

背後を取ってレナンへの盾にしつつ、クロテアの声が十分高まった所で、脇を撫であげフィニッシュに首筋を強く吸ってやる。

「やっ　ダメっ　あ、あ、あああああーっ！」

くてりと脱力したクロテアを寝かして、つぎの獲物へ。

「クロちゃん、しっかり！」

「ダメ・・・・・　ジンジンして力が入らないの。シロだけでも逃げて」

「そんな事出来ないよ、クロちゃんを置いて行くなんて――　でも、そんなに気持ちいいの？」

「悔しいけど・・・・・　かなり・・・・…」

ヒソヒソと麗しい友情？　に盛り上がるシロエ、と、見せ掛けて。

「これ以上好きにはさせん！」

飛びかかって来たレナンをキャッチした。

「ぬあっ！」

細身の身体を抱き上げ、脇腹辺りをさすってやると、ゾクゾクと身体を震わせる。

「ちょっと待て、これはおかしいー　ひゃっ」

「はっはっはっ　すぐに気持ち良くなるって」

服がクロテアより薄いせいか、手応えがよりダイレクトだ。そっと両手で胸を包み込むように触れて撫で回してやる。

「いや、もう気持ちいー　じゃない、ひゃあああっ」

ヤワヤワと揉みしだく。存分に。誰だかしらないが、女性を楽器に例えた奴は偉大だ。

「あっあっ　ダメじゃ、気持ち良すぎるっ　ああっそこはー」

背後から抱きしめる様にして右手で左胸を揉み、左手は右の脇腹をさすり、クロテアと同じく首筋を吸ってやると、レナンはガクガクと身体を震わせてひざから崩れ落ちた。

「さぁーて？」

シロエに振り向くと、彼女はひざからクロテアを下ろし、ゆっくりと立ち上がった。

「分かりました。勇者様を傷つけた上、私だけ逃げるわけにはいきません」

そう言って、自分から近寄ってくる。

表情は真剣そのものだ。

「こういう事は初めてですが、二人ともなんだか気持ちよさそうでずるいです！

あっ、いえ！

そうじゃありません、私の胸で勇者様が――――」

なんかテンパってるだけらしい。

いきなり本音っぽい台詞をこぼすと、耳まで真っ赤になってしどろもどろだ。

「ダメよ、シロ。あなただけは綺麗なままで居て……」
「そうじゃ、中年の毒牙にかかるのはわしらだけで十分じゃ！」
くたりと倒れたままの二人が、時々ピクピクと震えながらシロエを諭す。
「レナン様、クロちゃん。いいの……　例えお嫁さんになれない身体にされても、勇者様になら」
えらく人聞きの悪い事を言いつつ、シロエはオレの手を取って自分の胸にそっと押し付けた。
「あ……　はぁ」
ピクン、と一瞬だけ強張ったが、ため息とともに脱力し体を預けるようにもたれ掛かる。
「初めてだから、優しくして下さいね？」
恥じらいに頬を染め、潤んだ瞳で、なおかつ上目遣いで、身体を寄せた美少女からこんな台詞を聞いて、崩壊しない理性が有るだろうか？
いや、断じてない！
「嗚呼、私のシロが汚される……」
「前々から思っておったが、クロと組ませて置くのも危ないかもしれんのう」

フカリとした柔らかい感触。
指の動きに合わせて自在に形を変えながらも、たっぷりとしたそれには張りがある。
「ん、はぁ…　あっ、あ…　すごい、ピリピリしてー」
ヤワヤワと揉みながら、指をさ迷わせる。
やがてぷっくりと膨らんだそれが指先に当たる。
「や、あっ　そこ、ダメぇ…」
シロエは身体をよじって指先から逃げようとする。
「そこって、ここか？」
しゅっと強く擦ってやると、シロエは背を丸めるようにして身体を震わせる。
「ひぅっ　んはぁ、はぁ…　ダメ、ジンジンして、ピリピリして、何も考えられないです…」
右手は胸を刺激しながら、ローブの合わせを開く。先の騒ぎに慌てて起きて来たのか、その中は薄絹のネグリジェのままだった。
そっと、薄い布一枚だけを隔てて、触れる。
汗にしっとり湿った肌の熱と、今まで以上に感じる弾力。
「だめ、だめですっ　あっ　あっ」
すっかり息を乱し、より大声でよがるシロエ。
いつの間にか、もじもじと内股を擦り合わせている。

「はぁ、はぁ…　お願いです、勇者さまぁ。もう、もうー」

クチクチと湿った音が小さい響く。

シロエはオレの服をギュッと握って、涙に濡れた瞳で見上げる。

こらえきれずぴったりと押し付けられたシロエの身体はほてり、その柔らかい肉の感触が興奮を加速する。

「あ。これって？」

気づいた事を言う前に、きゅっと先端を両方つまみ上げ、二人と同じように首筋に何度も口づけすると、シロエはぴんと爪先立ち、ぶるぶると震えた。

「ひゃううっ　キス、だめっ　気持ち良すぎるのっ　コリコリしないでくださ…　あ、あああぁぁぁっ」

声が途切れ、意識を失ったシロエがずるずると崩れ落ちる。

レナンとクロテアは、と見れば、なんだか潤んだ目でこちらをじっと見ていた。

シロエのローブの合わせを直して、抱き上げる。

「ま、待て！　それ以上はさすがにまずい。

どうしてもと言うなら、わしが相手をするから、シロは許してやれ」

はっと我に返ったレナンが、制止する。

「止めなさいよ！　シロを喰っちゃったら、末代まで祟るわよ！？」
慌てクロテアも立ち上がろうとして腰砕けに倒れる。
「阿呆。さすがにそこまでするかい。
上まで運んで寝かすだけだ。お前らも順番に運んでやるから、寝とけ」
言い捨てて2階へ向かう。
いやまあ、実はちょっとだけやばかったが。
完全に意識を失ったシロエをベッドに下ろし、脱がすかどうか少し迷ったがローブもそのままでシーツをかける。
正直、目を覚ましてもあの雰囲気だったら、さすがに止められないかも知れない。
そそくさと下へ戻ると、レナンとクロテアがいまだに倒れたままヒソヒソと話し込んでいた。
「あー、いやしかし、なんじゃな。クロよ、感じたか？」
「なっ　あぁ、うぅぅ～　はい…　何と言うか、敏感な所にくると、とんでもない感覚でした」
「うむ、わしなんぞ、未だに抜けた腰が戻らんわ」
「薄着ですもんねー　あぁ、シロが心配だわ。
あのエロ親父、ネグリジェ1枚のシロに触りやがって。こんな事なら昨夜思い切って―――」
「冗談に聞こえんからやめんか！」
何を話してるんだか。

わざと足音を大きくしてキッチンへ入ると、二人は慌てて口を閉じる。

「クロテアの部屋はどこだ？」

「いらないわよ！　あんたなんかに運んでもらいたくないわ！」

「じゃあ、レナン行くか」

「うむ、1階の奥じゃ」

サクッとながしてやると、クロテアはアヒルのように口を突き出して膨れてみせる。

意外と可愛い奴だ。

ひょいとレナンを抱き上げて、キッチンを出る。

「全く、あまり虐めるでないわ」

むにーっと口の端をレナンが引っ張る。

「んー、オレは仕返ししかしてないぞ？　それより、さっきの話しだが」

レナンを左腕で抱きなおし、ドアを開ける。シロエより小柄な分、楽なものだ。

ベッドに下ろしてやっても、レナンは無言でじっとこちらを見つめている。

「聞いてるか？　さっきの話しなんだが」

「うむ、そうじゃな」

レナンはぷいと視線をそらして、ボソボソと続ける。

「確かに、わしが言い出した約束じゃ。
あの場で返事をすれば、皆も気を使うじゃろうしな。
それに、わしとて伊達に長生きはしておらん。
そ、その、男の生理というものにも理解はあるつもりじゃ。

うむ、約束じゃから仕方ない。
わしを好きにするがよい！　ただし、シロとクロには内密にせよ。
それからー　ひゃっ？」

そっと頬に手を添えて、角度を合わせて顔を近づけ、そして――――

「え、あ、うぅ～～～　頼むから優しく、ぴぎゃっ！？」

ガツンと強めにヘッドバットを決める。

「お前がオレをどう見ているか、よーく分かりました。
ついでに言えば、虎挟みに進んで足を突っ込む趣味はない！」

「え、あ！　うぅ……　す、すまん。そういうつもりでは無いのじゃ」

レナンはしょんぼりと肩を落とし、涙目で額をさする。
どうやら、まだボケているようだった。
ベッドに腰掛け、じっと見つめる。レナンは居心地悪そうに、もじもじと額をさすり続ける。

「あのなぁ。冷静に考えろよ？　オレ達は、いつそういう関係になった？」

「は？」

レナンの手が止まる。

「む？　むむ？　そもそも、わしはなんで怒られたんじゃ？　というか――――」

レナンの腕が、しっかりと首に巻かれる。

「なんで、被害者のわしが怒られねばならんのじゃ！？　このエロ親父がっ！！」

そのまま引き倒されて、マウントポジションを取られる。

「やっと気づいたか」

「やっと気づいたか、じゃないわ！！

このたわけーっ！　というか、虎挟みってどういう例えじゃ、ド助平が！！」

拳を振り下ろそうとしたところで、レナンはへにゃっと倒れこんだ。

「むう、まだ腰が抜けておったわ」

軽く笑いながら、俺は昨夜の顛末を色っぽい所は端折ってレナンに教える。

レナンに寄れば、夢魔と淫魔は別種の魔族であり夢魔の方が理性的で上位に位置するらしい。

「って分けで、お前らが敏感になってたのは、夢魔のブレスのせい

だろうな。
かなりハァハァ吐いてたみたいだし、換気とかしてなかったから、キッチンには結構な濃度でこもってたんじゃないか？」
「ちょ、ちょっと待て！？」
ぎょっとして、とレナンが叫ぶ。
「ん？」
「そ、そんな所にクロを置き去りにしたのか！？
おぬし、わしを運び出す時またドアを閉めたじゃろ？
あれから結構時間がたっとるぞ！」
「あ。」
コンマ数秒で脳内に展開される妄想。
なまじ触ったりして反応を見ている分、その妄想はリアリティにあふれており――――
「ななな、なぁっ　何を想像しとるか、このクソたわけーッ！！
あわわわっ　あ、あてるな！　ひぃ～～～っ、腰がまだ抜けて動けぬっ！？
ご、ごりごりするっ！？　やめよ！　動かすでないっ！
ぎにゃあああああ――――――――――――――――――――っ！！！」
体の上でじたばたと暴れ回るレナンを宥めるのにまたしばらくの時間を要する事となった。
仕方ないだろ、男だし。

そして女神は舞い降りる

結局、その日は出発を諦めた。

クロテアを回収に行ったら予想通り凄い事になっていてまたひと悶着（この件についてはまたいずれ語る機会もあるだろう）があったり、全員が半日以上腰砕けのままでかなりの時間が潰れたからだ。

夢魔＜ナイトメア＞のブレスって凄い、俺は改めてそう――――

「あれ、ちょっとまて？」

ふ、と思いつく。

それほどの効果のあるブレスが、一番長時間キッチンに居て、なおかつ直接吐き掛けられていた俺に大した効果が出なかったのは何故だろう？

「あとでレナンにでも聞いて見るか」

皮を剥き終えたジャガイモを刻み、大鍋にぶち込む。

女性陣が全員腰砕けの今、食事を作る人物がいないためお鉢が回ってきた次第だ。そもそも旅に出る予定だったのでキッチンには大した材料が残って居なかった。有ったからと言って大した料理が作れるはずもないので、メニューは誰でも出来るポトフもどきだ。

引き続き不慣れな包丁でしょりしょりとニンジンの皮を剥き、玉ねぎもカット。形は不恰好だが仕方あるまい。味は変わらないはずだ。さらにだし兼用で干し肉をちぎって放り込む。カレー粉でもあ

れば後は楽だったのだが、さすがになかったので塩と胡椒をぱぱっと振って、かなり薄めの味付けに仕上げる。物足りなければ自分で味を足してもらえばいいだろう。
火加減の方はどうしようかと思ったが、カマドの中の火の精霊がちょうどいい加減に保ってくれていた。

「しかし、便利だなお前。連れて歩きたいぐらいだよ――――　うわっ！？」

笑いながら話しかけた瞬間だった。
いきなり炎がカマドからあふれ出して一瞬で俺の全身を包みこむ。

「うおおお！？　なんじゃこりゃあああああっ」

とっさに床に転がって火を消そうとするも、一向に消える気配はなくパニックを起こした頭が水道の存在に気が付いた瞬間、それに気づいた。

熱くない。
ゆっくりと起き上がる。体を見れば、まるで自分が火の精霊になったかのように燃えている。
が、ちょうどいい温かさは感じるものの、焼き焦がされる苦痛は感じない。

「……お前の仕業か。驚かすなよな」

ふと気が付けば、手のひらの上に火の精霊が直接腰を降ろしていた。クスクスとした笑い声が聞こえたと思ったら、全身の炎は胸の辺り、ポケットの位置に収束して消えた。
そっとそこに手をあてる。固いオイルライターの感触。半生を共

にした１９９３年製スターリングシルバー、鏡面仕上げだった表面は今ではすっかり燻し銀だ。

「そういえば、銀にはその手の意味があったか」

取り出したライターには炎が踊るかのような複雑な紋様が現れており、その中になにやら小さな文字も見える。蓋を開けると独特の澄んだ金属音と同時に、にゅうっと火の精霊が顔をだした。どうやら、ここを住処にする事にしたようだ。

「はは。ま、これからよろしく頼むよ……」

これじゃ永久保障はもう効かないだろうな、と思いながら俺はライターをポケットに治めた。

※

「……あー、メシ。置いておくな？」

最初に行った二階では、二人がそろってシーツを頭からかぶって丸くなっていた。

クロテアが何かブツブツ呟いていたので、そーっと耳を近づけて見ると「オヤジ死ねオヤジ死ねオヤジ死ね……」と延々と呪詛の言葉を吐いているのが怖い。

ぐったりした気分でシロエの方を伺うと、こちらは「はぅ～～～」とか「ひぅ～～～」とか意味のない言葉をこぼしながらもじもじと身をよじっていてなんとも可愛かった。

苦笑いを浮かべつつ再びキッチンに戻り、名前は分からないが握りこぶしほどの大きさの固くて黒いパンをひとつと、ポトフもどきをよそった皿を木製のトレイに乗せ、一階の部屋へ。

「さて、今度はレナンか。面倒くさいな」

奴のことだから、中に入ろうとすれば必ず何かを投げつけて来るだろう。その予想は見事的中。外開きのドアをその影に隠れるようにして開けてやると、かなりゴツイ文鎮らしきものが物凄い勢いで飛んで来た。

「いや、当たれば死ぬぞコラ」
「死んでしまえ、エロ親父」
「訴えるぞ！？　そして勝つぞ！？」

ふーふーと鼻息も荒くいきり立つレナンに、トレイを差し出す。

「とりあえず、メシ。あと、さっきのアレだけどな――――」
「やかましい！　思い出させるなたわけーッ！？」
「いいから最後まで話を聞けっ！？」
「ぬがーっ　離せエロ親父ぃっ」

振り回す枕を左腕で受けながらトレイを机に置いて、改めて両手を掴んで動きを止め、素早く蹴り上げてきた足を膝を使ってガードする。
ああ、やっぱりこいつは面倒くさい。さっきよりも妙に暴れる力が強い気がするし。

「俺が平気なのはなんでだと思う？」

「助平だからに決まっておろうが！」
「そーじゃねぇっての！　ブレスだよ、ブレス！　一番長時間あそこに居たのは俺だろうが！」
「ぬ？　そういえばそうじゃのう」

ようやく意図が通じたレナンはぴたりと動きを止める。
俺はレナンを開放してベッドに腰を降ろして続ける。

「夢魔は女だった。だったら、俺が一番ブレスの影響を受けてもおかしくないだろ？」
「あんだけわしらに散々しておいて、何を――――」
「アホか、テメェ。確かに、直接吹きかけられた時はちょっと来たが、それだけだ。本気で理性なくしてたら、あの場で三人とも喰っちまうに決まってるだろが。全員見た目はいいしな。違うか？　男の生理に理解の有る大賢者さんよ？」

あてこするように言ってやると、レナンは恥ずかしそうな顔と嬉しそうな顔と不愉快そうな顔を目まぐるしく入れ替えながら「ぬ、ぬぬぬ……」と唸る。

「で、だ。単純に考えると俺の能力ってそう言う関係、魔法無効とかじゃないのか、ってことだ。　俺が勇者として選ばれた対魔王戦の特効能力はお前にも分からないんだろ？」
「ふむ。しかし、魔法無効であるのなら精霊使われの説明が付かんじゃろ？　というか、どうやって連れまわしておるんじゃ？」

レナンが、いつの間にか肩に現れていた火の精霊を指差した。

「使われ言うな！　さっき、このライターに取り憑いたんだよ。って、一人一能力とか制限があるのか？」

俺が胸ポケットから取り出したライターを受け取り、あれこれと眺めながらレナンが続ける。

「いや。もっと単純に、能力に魔法無効があるならば魔法的存在である精霊との交渉能力があっても精霊の働きまで無効化、精霊そのものを消してしまうはずじゃろ？　じゃが、この火の精霊は普通におぬしに懐いて近寄っておる。であれば、ブレスが効きにくいのは抵抗（レジスト）力が高いと考えるのが自然じゃな」

振りだし、か。そげぶとかなかなか使い方が面白そうだったんだが。いや、しかしだとすればそもそもこの世界の勇者ってのはどう言う存在なんだ？　あの時レナンは召喚呪法が成功したのだから俺は勇者のはずだと言ってたな。

「じゃあ、そもそも勇者の召喚呪法ってのはどういうものなんだ？　どういう基準で異世界に居た俺を選択して呼び寄せたんだ？　能力基準じゃないんだろ？」

「ふむ。では少々長くなるが、説明してやるかのう。喰いながらでもいいじゃろ？　むう、ニンジンを入れおったか……」

レナンは俺の隣に腰掛けてトレイを膝に乗せ、ポトフもどきをつつき始める。

「好き嫌い言ってると大きくなれんぞ？」

「やかましいわ、たわけ。わしはこれがベストサイズじゃ！　ちんまりして可愛いんじゃ！」

「おっぱいの事か？」

「黙れド助平！！」

そうして語られた内容は本当に長かった。

まず、この世界には禁術と呼ばれる呪法がいくつかあるのだそうだ。

一つ、死霊魔術（ネクロマンシー）。

コレはまあそう説明する事なないだろう。モラル的な問題もあるが、この感染的な呪術は生命体全てを滅ぼしかねない。その知識を記した古代の魔導書や石版などは幾つか見つかっているが、発見次第即座に破壊もしくは封印処理され、もしもこれらを隠匿していることが発覚した場合、一族郎党皆殺しにされるほどらしい。

二つ、時魔法（タイムコントロール）。

この魔法の難易度は恐ろしく高く成功率は低い。

自身の時間を操作するだけならず、時を渡って過去や未来に行く事も出来るからだ。

若返りの秘薬代わりとして自分の時間を巻き戻そうとして失敗、巻き戻しすぎて赤ん坊以前まで戻って消滅したり、逆に老人化したりなどの例があるそうだ。

そして、時間旅行は言うまでもないだろう。成功して歴史を改変されてしまう事も問題だが、世界そのものをしっちゃかめっちゃかにしてしまう可能性の方が高いらしい。

これはレナンの説明にはなかったのだが、タイムパラドックスの事だろうと理解した。よくＳＦで言われるあれだ。時の流れを樹木に見立て、可能性の分岐世界を枝とする。まっすぐ伸びている幹の頂点が現在だ。時を超える行為によって分岐の可能性が変わり、樹木という形（世界）そのものが捻じ曲がり、崩壊する危険性がある。

まあ、こっちのほうは歴史は人々の記憶により維持されているので過去は簡単には変えられない、と言う説も有る。そう、電車に乗ってやってくるアレだな。

そして三つ、異界召喚（サモンアナザー）。

これが、もっとも分からない呪法だった。勇者召喚の呪法として連綿と伝わっているものの、過去の歴史においてこれが使用されたと言う記録はないらしい。

高価な触媒（マテリアル）を大量（小国ならば年間予算に匹敵するほど）に使い、様々な秘薬を服用して不眠不休で儀式を行い、丸三日の詠唱の果てにようやく術式が発動する。しかし、そこまでしても世界が必要としていないかぎり勇者が召喚される事はないと言う。

レナンの推測によれば、世界そのものが内憂（世界の破壊者である魔王）を駆除するためにあえて受け入れる異物が勇者なのではないかと言うことだった。

「……分かる範囲では、こんなもんかの」

「ああ、なるほど。それで世界にとって必要でなかったり、劇薬過ぎる存在なんかは呼ばれないわけだな……　じゃあ、世界そのものに意思があるってことか？」

「いや、その基準は神が判断すると言われておる」

「神か。この世界じゃ観測できる存在として実在するのか？」

「いや、そのような例はない。が、全知全能＝神、とするならば、神は世界であると言っても良かろう？」

「そういうレベルか。なるほどな……　っと、客か？」

「ふむ？　そういう予定はなかったがのう？」

玄関のドアベルの鳴る音が長い会話を中断させた。二人つれだって玄関に向かい、レナンがドアを開ける。

「この大賢者、レナンの屋敷に何用かの？」
「リリトと申します。勇者様にお目通りを」

聞いた事の有る声に、レナンの肩越しにひょいと外を覗く。そこには、旅装姿の黒髪黒瞳の少女が一人。少女は俺の姿を認めると、

「来ちゃいました」

と、はにかんだ。

「……勇者よ。誰じゃ、これ？」
「誰って……　夢魔、だな。夕べの」
「……まだ外は明るいぞ？」
「はい。勇者様と契約したら、なんだか物凄く位階（レベル）が上がってしまって夢魔（ナイトメア）から夜の女王（モリガン）になりました。それで、昼間でも自由に行動出来るようになったと思ったら居ても立っても居られなくなって……　来ちゃいました」

「やっぱり契約しておったのか、このクソたわけーッ！？　勇者が魔族と契約してどーするんじゃ、この助平親父がーッ！！」

怒り狂ったレナンが俺の首筋を掴んでがっくんがっくん振り回し、あわてて夢魔、いや、リリトが止めに入る。
最終的に、あまりの大騒ぎにシロエとクロテアまでが二階から降りてきて仲裁に入り、三人はこの件について会議をすると言う事でレナンの部屋へこもり、俺とリリトは台所で待機と言う事になった。

「……ご迷惑、でしたか？」

俺の入れたお茶のカップを両手で握って、うつむいたリリトが小さな声で呟く。

「本当は、夜だけのつもりだったんです。貴方が誰と恋人でもいい。私は夢魔だから夢の中だけで、って。でも、夢魔じゃなくなって、いつも一緒に居られるって思って……」

ぽたぽたと雫がこぼれる。俺を思って女が悲しみの涙をこぼしている。胸の奥に、ぎゅっと鷲掴みにされたかのような痛みが襲う。

「なあ、どうして俺を選んだんだ？　やっぱ、勇者だからとかか？」

「違います！」

リリトは激しく首を振って即座に否定した。

「貴方が勇者と呼ばれる存在だって言うことは、あの時の貴方の話で初めて知ったんです……」

「じゃあ、なんでだよ？」

ずず、っとお茶をすすり、その苦さに俺は思わず眉をしかめる。

「……それは、その。ひとめぼれ、です」

「は？」

「夢魔は、フィーリングで相手を選ぶんですよ。本能と言ってもいいかもしれません。でも、ピンと来る人が居なくて、私は何年も契約する相手を探していたんです。仲間内では行き送れみたいな事を言われてたんですよ……　そして、やっと貴方に出会ったんです。貴方を見ただけで体が熱くなって、絶対にこの人しか居ないって分かったんです。それで、あとは――――」

沈黙が落ちる。ずいぶんとまあ、買いかぶられたものだと思わないでもない。が、勿論悪い気などしない。

「やっぱり……」

リリトが顔を上げて、無理やり作った笑顔を見せる。

「やっぱり、ご迷惑ですよね。帰ります、私。でも、その。夜、また――― 駄目、ですか？　いやだったら、変なことしませんから。そばにいるだけでも……」

不安と恐れに震える声で、おずおずとこぼす言葉に、ため息を一つ。

びくり、とリリトの体が震える。

「バーカ。お前は俺と寿命を、人生を共有したんだろうが？　そういうのは普通、その、あれだ……」

意味が分からないのか、じっとこちらを見上げるリリト。ボリボリと頭をかく。流石に続きを言うのは照れくさい。

が、言わなければならないだろう。

一匹の男として、ここで引くなんて事はありえん。

「その、なんだ……　夫婦、だろ。そういうのは？　だったら、俺のそばにいる事に遠慮なんかしないでいいか――――」

みなまで言う前に、リリトが飛びついて来た。それを俺は全力で受け止め、抱きしめる。あやすように背中を叩きながら、胸の中に浮かぶ思いを正直に言葉にする。

「あんまりあっさり帰るから、正直ちょっと凹んだんだぞ？」
「ごめんなさい。ごめんなさい……」

長く生きて、人生も折り返しにさしかかっていたが、今更こんな事があるとは思いもしなかった。俺の胸に顔をうずめて泣きじゃくるリリトの顎に手を当てて上を向かせる。

あれこれ順番が無茶苦茶ではあるが、これだけはけじめとして言っておかねばならないだろう。

「苦労ばっかりかけるかもしれんが、それでも良かったら俺の所に嫁に来い、リリト」
「はい！」

返事はノータイムだった。

俺たちは初めて、きちんとお互いの意思を表明したした上で唇を重ねた。

こうして、勇者と呼ばれたいい年をしたオヤジの長い長い物語が始まった。

エピローグ

ルゴサ暦８１３年１２月。
異世界より召還された勇者は魔族を妻として連れ王宮へ現れた。
様々な議論がなされたものの、国家として後のない状態に追い込まれていた女王は、踏み絵として勇者ＰＴに単独での魔王領強行偵察を命じる。
この時、王国従士の一人が加わり勇者一行は６人ＰＴとなった。

８１４年１月。
勇者ＰＴ魔王領へ突入。
なぜか魔王軍による抵抗もなく、農奴として強制労働をさせられていた人々を解放しつつ、魔王城をめざす。
同年２月、魔王城があったと言われる地点に到着。しかし、そこにはただの草原が広がるのみであった。数ヶ月に及ぶ調査の結果、開墾された農地だけを残し魔王軍は城ごといずこかへ消えてしまったと結論される。
この結果、領土をより豊かな形で取り戻したことにより、王国はより豊かに繁栄していく事となる。
同年１０月、勇者とその妻は救国の英雄と言う形で王国から褒賞と居住権を得る。

８１６年７月。
元勇者は冒険者ギルドを立ち上げ、初代ギルドマスターに就任。仲間たちも幹部として全員それに協力した。
厳しい規則で荒事や魔物退治で生計を立てていた粗暴な人々を取りまとめたことにより、一般人にも歓迎され、ルールを守るものには冒険者という称号と身分証を与え、冒険者の宿の設立により仕事

の斡旋やその生活をサポートする事により加入者は後を絶たなかった。
そして冒険者ギルドは超国家組織として世界に広がって行く事となる。

※

そして、ルゴサ暦８５０年。
俺はベッドの上でその生涯を終えようとしていた。
１０年ほど前にギルドマスターの地位は信頼できる若手、娘婿のうちの一人だ、に譲渡して悠々自適の隠居生活を堪能していたのだ。
リリトとの間には９人の娘を授かった。娘たちはそれぞれ美しく成長し、ルゴサの戦乙女と呼び習わされるほど高名な冒険者として活躍、それぞれに結婚して家庭を持ち、たまに孫を連れてあそびにきてくれる。

伸びたぼさぼさの髪は真っ白に染まり、貫禄を付けるために生やした長い顎鬚も同じく真っ白。指も骨ばり、すっかりよいよいの爺になった今でも、リリトは若く美しい姿のままで俺に尽くしてくれている。
ベッドに上がりこんだ孫が、「じいじ～」とか言いながら俺のヒゲを引っ張る。はて、こいつはどの娘の子だったか、ちと思い出せない。

そして俺はゆっくりと瞼を閉じる。
振り返って見れば、ろくでもない事も多かったがトータルで見ればいい事の方が多かったように思う。何よりも、リリトと言う妻を得た事は何にも変えがたい幸福だった。

そう、俺の人生は幸せだった。

――完――

「……！」

なんだ？

「……殿！」

誰かが俺を呼ぶ声がする。
孫でも、娘でも、妻でもない声。
しかし、何処か懐かしい声だ。

「……殿！　ええい、いい加減に目をさまさんか、クソオヤジ！！」

無茶苦茶言ってやがるな、このクソアマ。
苛立ちをバネにして目を開く。年寄りを敬う事を知らぬ小娘に、
何かひとこと言ってやらねば気が済まない。

「なん…だと…」

そこには、白い髪に赤い瞳を持つ少女が――――――

エピローグ（後書き）

【おまけ・ステータス解説】

・レベル値の目安

Ｌｖ１～　かけだし。素人に毛が生えた程度。

Ｌｖ３～　一人前

Ｌｖ５～　一流

Ｌｖ７～　超一流。国家最強クラス。

Ｌｖ１０　人間の頂点

【オヤジとリリトのステータス】

名称：オヤジ

職業：労働者Ｌｖ３→戦士：Ｌｖ６

特殊能力：???

技能：片手剣：Ｌｖ５　丸盾：Ｌｖ３

名称：リリト

職業：夢魔Ｌｖ１→Ｌｖ５→夜の女王（モリガン）：Ｌｖ８

特殊能力：魅了の吐息Ｌｖ５　影使い：Ｌｖ７

リリトは前衛を受け持ちます。影を武器化してずんばらりん。

現役時代はギルマスよりも嫁さんの方が強くて可愛くて健気なので人気が有りました（笑）

Ｏｙａｊｉ　Ｍｅｅｔｓ　Ｇｉｒｌ．　ＩＩ

「……勇者殿」

今日、朝からの出来事を思い出す。

とはいえ、ずっとベッドの上で寝ていた気がする。はて、昼飯はまだだったか？

「……勇者殿？」

ため息を一つ。

仕方ないので軽くこれまでの人生を振り返ってみる。

実にいい人生だった。

妻を得て、娘を授かり、家族に恵まれた。俺の親のようにＤＶをした覚えもないし、ＤＶに疲れた母親が浮気の果てに子供を捨てて通帳を持って夜逃げするような事もなかった。

そういえば長女を嫁に取ろうとやってきた男とガチの殴り合いを繰り広げた事もあったな。終わった後、男同士で酒を酌み交わしたが、口の中がズタズタになっていて二人とも悶絶したのもいい思い出だ。結局、娘だけでなくギルドマスターの地位も奴にくれてやってしまったのだが。

最近はすっかり骨と皮だけになった体と、白くなった髪とヒゲが――――

「白くねえな。というか、この体は……」

若かりし日の全盛期程ではないが、冒険者ギルドを立ち上げてあちこち飛び回っていた頃の鍛えられた体だった。ちなみに、こっちの世界の食い物が合ったのかどうか知らないが、薄毛は解消されている。

なぜか死にたいほど懐かしい気持ちになったので遠い目をしてみると、ガッと鈍い音とともに目から火花が出るような痛みが襲った。

と言うか本当に火花でた。チカチカっと。この痛みを、俺は覚えている。

「っぅ〜〜〜〜　な、何しやがるクソレナンっ」

「さっきから呼んどるじゃろが、クソオヤジ！　」

視線を落とせば、何やらねじくれた木の杖をグリグリと押し付けてくる少女が目に入る。

純白の長い髪をなびかせ、ルビーのような透き通る深紅の瞳を大きく見開いて、プリプリ怒っている姿はどこまでも愛らしかった。

こいつも、リリトと同じで姿かたちが変わらなかったな、と思い出す。「不老長寿か不老不死のどっちかじゃが試す気にはなれんのう」と楽しそうに笑っていた。

「用があるならポンポン人を殴るんじゃねぇよ！」

ペシッと杖を払いのける。

「大体、なんで俺を今更勇者って呼ぶかは知らんが、なんの用だ？　って言うか、なんで俺は生きてるんだ？　老衰で死んだはずだったのに……」

「わしだって貴様のようなオッサンを勇者なんて呼びたくないわっ」

払いのけた杖を再び突き付け、少女は偉そうに薄い胸をそらして言った。

「じゃが、召喚呪法は成功しておるのだ！　貴様がなんであれ、この魔王との戦争を終わらせる鍵――――」

二人してきょとんとした顔を見合わせる。

「おぬし、なんでわしの名前を知っとるんじゃ？」

「お前、もしかして俺の知ってるレナンじゃないのか？」

どうやら、かなり面倒な事になって居るようだ。せっかく幸せな気分でゴールしたと言うのに、世界はまだまだこの俺に働けと言うらしい。

残念な勇者

「参ったな……」
「参ったのう……」

レナンと二人、キッチンで茶をすすりながらため息を付く。
やって来たシロエとクロテアは別室で待たせている。話の内容が内容なだけに、まずはレナンと二人で情報を突き合わせる事にしたのだ。

「よもやせっかく呼び出した勇者の頭がアレで残念状態だったとはのう」
「人聞きの悪い事言うな！？」
「じゃが、普通ならそう思うじゃろ？　ただ、頭がアレと言うにはいささか偶然の一致が多すぎるからの。わしとしては、おぬしの言う事を信じても良いと思っておるわい」

レナンはすぐにカッとなって暴れたり色々と欠点の多い女だが、こういう理詰めの話をした時の頭の良さを俺は気に入っている。

ただ単純に時を遡ったと思っていたが、俺のその安易な予想はあっさりと覆されていた。

先ず第一に今年は王国暦８５０年、つまり俺が死んだ（生きてるけどな）その年だった。８１３年に魔王は襲来しておらず、翌年にかけて隣国との間に小さな小競り合いがあっただけらしい。

そして、シロエとクロテアは存在するが、シロエの職業（ジョブ）は司祭（宗教的な役職ではなく、いわゆるＲＰＧで僧侶などと呼ばれる意味

でのプリースト）になっていた。

「確かにシロエは白魔術を使うが、白魔術師という呼び方は場合によっては蔑称と受け取られることも有るから気を付けるんじゃぞ。白魔術は神聖魔法、白魔術師は司祭と言い変えておけばよかろう」

との事だ。

さらに、俺が元の世界での知識を使って組織したはずの冒険者ギルドは存在しているが、その設立は８１６年ではなく８４５年、わずか５年前のことで未だに社会的地位は低いらしい。ちなみにレナンは俺の時と同じように身分証（マジックアイテムである）の作成に協力したとのことだ。

もっとも異なる事は神の存在だ。前回は俺の居た世界と同じように神は象徴的な存在だと認識されていたが、今回は違う。シロエのジョブから分かるように、実効力を持って存在する。

司祭とは神からの啓示と神聖魔法を与えられた者を指す。

神聖魔法とは神に祈りを捧げることで奇跡を起こすものだ。祈る言葉はどんな言語でも良いが、集中力を極限まで高め入神（トランス）状態へ至る必要がある。怪我や病気などの治療魔術、範囲型防御系魔術、闇系生物への特効魔術からなる。

シロエが信仰する神とは、女神リリト。最初に地上に降りた神であり、人間と恋に落ち９人の娘を産んだと言う。いわゆる地母神であり豊穣と慈愛を司り、娘たちもまたそれぞれ女神として信仰の対象になっているのだとか。

他にもこまごまとした所が違うのだが、それについてはまたいず

れ語る機会もあるだろう。要するに、俺が世界に残した痕跡を、俺の存在を省いて歴史のあちこちに分散配置したような感じか。

正直ショックがでかい。この世界では我が最愛の妻は、別の男とくっついて女神様に配役されていると言うのだ。いや、同名の別神（べつじん）という可能性もないわけではないが、この世界の変わりようから推測するに今夜寝床に忍んで来ることは無さそうだ。

ちなみに、神と司祭は直接的な会話が出来るわけではなく、神託と言う形で曖昧なイメージを提示されることが稀にある程度らしい。シロエに確認してもらおうと思ったが、そうそう旨い話は無いようだ。

持てる限りの情報を提示し、レナンと二人考え抜いた結論はといえば。

「どうしようもないか、やっぱり」

「そうじゃのう。魔王軍の方は確かに最近動きがないからのう。おぬしの言うとおり、すでに居なくなっておる可能性も考えられるし、わしから女王に偵察を進言してもいいがの。じゃがそれが事実であったとしても、すまんが元の世界へ戻す呪法は見つかっておらぬ。呼び出したわしの責任として、おぬしがこれからここで生きて行くために出来る事は何でもしてやるつもりじゃが、女王に顔をつないでおけばそっちからも褒賞が引っ張れるはずじゃし、これからを生き易かろう。茶番と分かっておっても、魔王領までは一度行った方が良いのう」

すまなそうな顔でレナンが言う。

残念ながら、手の打ちようがないのだ。これは前回でもそうだった。一度呼び出されたら、帰るすべはない。それが勇者の運命と言

う事らしい。
仕方ない。では、この世界で出来るだけ安楽に生きるための交渉を始めよう。

「何でも？　それはアレか。お前を愛人にしてこの屋敷に引きこもってニート生活を満喫してもオッケーと言う意味か？」
「あああ、愛人じゃと！？」
「なんだ、本妻希望か？　すまんが、俺の嫁は――――」
「この助平オヤジが！！　そんな事いっぺんも言うておらんじゃろうがっ　甘い顔をしてやれば付け上がりおってからにっ！」
「やっぱいいわ。お前、ちっちゃいしなぁ……」
「そこになおれ、このクソたわけがーッ！！」

あっと言う間に掴みあいの大騒ぎ発生。

まあ、このぐらいのうさ晴らしぐらいは勘弁して欲しい。前回のような、何処に居ても大して差のない状態の時に呼び出されたわけではない。寿命が尽きた後とは言え、再び繰り返されるのならまたリリトを愛したかった。コレでも一途なんですよ、俺は。

「レナン様に何してんのよ！　この助平親父がーっ！！」
「ゆ、勇者様……」

さて、状況。
以下略。
結果。クロテアに張り倒された俺は二人がかりでぼてくりまわされ、美少女三人から何時間もの説教を受けた。勿論、正座で。

あれ。世界がこれだけ変わっても、この流れだけは変わらんのか？

残酷な真夜中の処女

竈でチロチロと燃える燠火(おきび)は、掛ける物がなくても十分な暖かさを感じさせてくれる。

だがしかし、いつまでその炎の前で待っていても精霊は現れなかった。

「お前もダメかぁ……」

前回では炎の精霊（？）はリリトよりも長く俺と行動を共にしてくれていた。

なんせ、ライターに取り付いたのだから簡単に持ち運べるのが大きい。お手軽かつ燃料のいらない火種としてこれ以上の存在はないだろう。家に戻れば暖炉でくつろぎ、外へ出かける時はライターに飛び込んでついてきた。別行動する時にリリトが冗談交じりに嫉妬していたのも良い思い出だ。

「久しぶりだな、こいつも」

胸ポケットから煙草を取り出す。

無論この世界に紙巻フィルター付きなんてない。パイプや煙管を使うものはあったが、器具は高価で入手が難しく、また葉の保存も手間が面倒だったので禁煙してしまったのだ。

郷愁に駆られて紙箱の蓋を開け一本摘み出して銜(くわ)える。

ライターの火の付け方にも実は色々な作法がある。たとえば、親指でオイルライターの蓋をはじき、返す動きでフリントホイールを擦(こす)る。この時、大げさに腕を振ってやると炎がたなびいてなかなか

見栄えがいい。若い頃に女にもてたくて覚えたカッコよく見える小技だ。
さて、こういうのは「ただしイケメンに限る」って注釈がつくのに気づいたのはいつ頃だったかな。
自嘲的な気持ちで、ライターを取り出した腕を素早く振る。オイルライターは機構が原始的な分、着火力は申し分ない。カチン、とカムが銀のケースを叩き、親指がフリントホイールをまわし、フリントから生まれた火花が、ウィックが毛細管現象で吸い上げたホワイトガソリンに着火、口元にライターを持ってきた時には、まるで松明のように赤々と燃え盛る俺の腕――――

へ？

真っ赤に燃え盛る炎が収束し、ダッxちゃんのように腕にしがみついた３０ｃｍほどの炎の少女の姿を取る。以前よりも大きくなったせいか表情が良く見える。機嫌を損ねた子供のようにぷくっと頬を膨らまして恨めしそうに俺を見ていた。

「……お前、もしかして最初からそこに居たのか？」

炎の少女は拗ねた顔のままでこくりと頷く。良く見ればなるほど確かに右手に持ったオイルライターは魔術的な刻印をその表面に浮かび上がらせていた。
だが、そんな事よりも重要な事がある。

「ってことは、お前は俺が過ごしたあの時間を覚えてるわけか？」

ぱちくりと目を瞬かせ、不思議そうに首をひねった。何を言っているのか分からないようだ。長い付き合いだからある程度は雰囲気と言うか勘で分かる。だがそもそもの精神構造が根本的に異なるた

め、概念や認識の違いあたりはもうどうしようもない。この場合で言うなら時とか世界とかだな。

「ああ、そうだ。リリト、覚えてるか？」

こくりと頷く。よし、行けそうだ。

「だったら――――」

シンプルな質問、はい、いいえで答えられる奴をいくつも繰り返す。どうやら俺の体験した時間の記憶を同じように持っているらしい。言葉を使いこなせるなら、もっといろいろな情報を引き出せそうだが、残念ながら今は無理だ。暇になったら言葉を教えて、コックリさんで使うような紙を使って会話を試みるのも良いかもしれないな。

なんにせよ、一人（？）でも記憶を共有できる存在が居るのは心強い。竈に収まった炎の少女を軽く撫で、俺はごろりと床に寝転がって目を閉じた。

※

「ん？」

静かに空気が流れる気配を感じて意識が覚醒していく。夢うつつの錯覚ではない。何者かがキッチンのドアを開けて中に忍び込もうとしているらしい。とはいえ、廊下側のドアなので恐らくは誰かが

水でも飲みに来たのだろう。たぶん、俺を起こさないように気を使ったんだな。そう言う事ならばと目は閉じたまま寝息を立てておく。レナンやクロがそんな気使いをするとは思えないので、ならば消去法でシロだ。

ぺたぺたとスリッパの静かな足音が響き、薄暗いキッチンの中を水道に向けて横切っていかず、俺の枕元でその足音は止まった。

「勇者様？」

わずかに脅えを含んだ声が響く。寝ぼけている様子もない。しかし、このタイミングでわざわざ二人で話すような事などないはず。

で、あれば一体何の用だ？

「シロか。こんな夜中にどうした。一人でトイレに行くのが怖いとかか？」

上半身を起こし少し意地悪い笑みを浮かべてシロエを見る。が、予想とは異なりその姿は愛用のネグリジェではなく体に巻き付けるように羽織った白いローブ姿だった。

シロエはふるふると首を振るとローブの中から両腕を伸ばし抱きつくようにして俺にのしかかった。はだけたローブの下から覗くのは一糸まとわぬ裸体だ。胸に押し付けられた迫力のあるおっぱいが柔らかく形を変えてむっちりとした感触を伝えてくる。直視する機会はこれが初めてだが、サイズは手からこぼれそうなグレープフルーツ大、ブラもないのに半球状を保った双丘にさくらんぼのように鮮やかなアクセントがぽつりと。愛でてよし揉んでよしの見事な一品である。

もしかしてついでに舐めちゃったりしても良いんだろうか、今夜

は！？

「勇者様……」

潤んだ瞳を閉じくちびるを差し出してくるシロエに、はっきり言ってカウントダウン状態である。3、2、1で勝手にレバーが動いて変身してしまいそうだ。ヒーローじゃなくて狼にだけどな。

だがしかし、相手はまだ若い人間の少女である。ついでに言えば、初対面から現在に至るまでの会話他において、こういう関係になるようなフラグは立ってはいないはずで、何かがおかしい。

そして前回ではリリトが来たタイミングでシロエが来たという事は、本当にリリトは別人と結ばれて神になってしまったのだろうか？

もし女神リリトに俺のように記憶があるのならば、司祭を迫らせる事になんの意味があるのか。あいつは女の子をこういう風に、自身の代行者として差し向けはしないはずだ。だが、記憶がないのであれば、俺に対するアクションに特に干渉はしないだろう。

このまま受け入れてしまえば、前回と同じように俺はこの娘と家庭を持ち再び平穏な人生を送る事になるのだろうか？

いやまて。

と、必死で思考をつなぎ止める。リリトの時も地雷があったはずだ。

「わたしの全てを貴方に捧げます。どうか……」

ああ、やっぱりか。

どうやら一目ぼれとかそう言う落ちはなさそうだ。体中を駆け巡っていた興奮が静かに冷めていく。この言い回しからして、この少

女は、某(なにがし)かの意思でここへ送り込まれたのだろう。
落ち着いてその姿を良く見れば顔色は青ざめてるし指先もかすかに震えている。未知の経験にかなり緊張、と言うか脅えて居るようだ。
とてつもなく勿体無いなーと心の中で血涙を流しつつも、獣欲に任せて押し倒さなくて良かったとも思いつつ、人差し指をシロエの唇にぴとっと立てて押しとどめる。

「勇者、さま？」

困惑した顔でシロエが問いかける。拒絶される事などまるで考えて居なかったかのような表情に、ほんの少しだけイラついた。何処かで見た表情だ。そしてその時も同じようにイラついた。
自然に、シロエに問いかける声も硬くなってしまう。

「シロエ、お前は俺の事が好きなのか？」
「…、愛します」

一拍の沈黙がシロエ自身の意思を否定する。そして、どうしようもない苛立ちが俺の心を占めていく。善意や愛情の押し売りをされることで傷つく存在がいると言う事を理解できないのだろうか。純朴であるがゆえにその善意の刃は果てしなく残酷だ。同時に、シロエが瞳に浮かべる色を見て古い記憶が呼び覚まされ確信した。

「そうか。でも、俺はお前の事は嫌いだ。どれだけ長く付き合っても多分好きにはなれないだろうな」
「え、あいたたたたたたっ！？」

左手でシロエの顔面を鷲づかみにしてＦｒｉｔｚ　Ｖｏｎ　Ｅｒｉｃｈよろしくギリギリと締め上げる。いわゆるアイアンクローと

言う奴だな。痛みに暴れるシロエの体からローブが滑り落ち、その白い裸身が全てあらわになるが今はまったく気にならない。情欲よりも、苛立ちよりも、ただ哀れみだけが俺の心を占めていた。

この表情とまなざしを、俺は２０年ちょっと前に見た事が有る。繁華街の歩道で箱を抱え募金を募っていたり、直営店の前で異様なテンションで声だしをしながら客引きをしていたり、だ。最近でも宗教団体名を冠した学校の生徒などに見かけられることもある。

狂信者。

シロエの表情とまなざしは、上から良い様に使い潰される下っ端の浮かべるそれだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1296z/

やさぐれ勇者血風伝　勇者様はオヤジ！？

2012年1月10日02時50分発行